法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-12

ダヴィッド・ロックウッド「黒服の労働者」

AKITA, Joju / 秋田, 成就

(出版者 / Publisher) 法政大学社会学部学会 (雑誌名 / Journal or Publication Title) Society and Labour / 社会労働研究 (巻 / Volume) 10 (開始ページ / Start Page) 146 (終了ページ / End Page) 160 (発行年 / Year) 1958-12-25 (URL)

https://doi.org/10.15002/00008977

現われている。労働者の意識の問題は、ほんらい社会学ないし社第に関心を高めるようになり、幾つかの研究や調査の成果として

よらに見受けられる。筆者のインフォーメーションの少いせいも

会心理学の領域で、イギリスよりむしろアメリカで発達している

紹介

アクワッド 「黒服の労働者

力 働 _秋者

H

成

就

析である。わが国でも最近、ホワイト・カラーの意識の問題が次 Consciousness "が示すように、かれらの階級意識の実証的な分者の提起しようとする問題は、 その副題 "A Study in Class にが働者ということであろう。用語はともかくとして、本書で著い労働者ということであろう。用語はともかくとして、本書で著い労働者ということであろう。用語はともかくとして、本書で著い労働者ということであろう。用語はともかくとして、本書で著い労働者ということであろう。用語はともかくとして、本書で著い労働者ということである。正確にいえば肉体労働者」と

関心がないというのではない。 階級間の mobility などについてof Clerical Labour in Britain "以来あまりきかない。このような「関心の空白」の主たる理由は、イギリスではやはり、労働うな「関心の空白」の主たる理由は、イギリスではやはり、労働うな「関心の空白」の主たる理由は、イギリスではやはり、労働ができよう。ちなみに、イギリスでも「階級」という問題自体にあり、それ以外のものは無視されてきたという事実に求めることあり、それ以外のものは無視されてきたという事実に求めることができよう。ちなみに、イギリスでこの種労働者の問題を正面からとりあげた研あるが、イギリスでこの種労働者の問題を正面からとりあげた研あるが、イギリスでこの種労働者の問題を正面からとりあげた研

情況とも関連して、われわれの目を、その背後にある社会的事情な問題が、世の関心を集め出したという事実は、わが国における右のような意味で、本書といわず、一般に本書の提起するよう

は並々ならぬ関心が払われている。しかしそれが階級意識の問題

として登場してこないところに意味がある。

ら事実は多くの識者の一致した観方である。即ち、肉体労働者を 聞出 行詰りを見せ、組合運動の内部でもそれが意識されつゝあるとい 近のイギリスの労働運動が行きつくところまで進んで、よらやく の直接関心をもつ対象ではないし、筆者の推察にすぎないが、最 に向けさせずにはおかない。もちろん、このような課題は原著者

働運動の側流として、あるいは足手まといとして放置されてきた 運動とのバランスを失いがちであるという二つの事実は、従来労 果を生んだのではないであろうか。著者が本問題提起の契機とし ホワイト・カラーの労働者に何程かの期待をかけさせるという結 方、より社会主義的な意識に支えられる労働党が、時として組合 てとりあげるいわゆる「誤れる階級意識(false class conscious 主体とする組合運動が固定化して進むべき方向を見失っている一

ness)」 というテーマ自体がこのような 意味をもつと考えられる

彼此の社会的背景の差異を考えて、できるだけわれわれの関心に 近い角度からとりあげたいと思う。 は、その方法と結論のいずれの点においても重要な問題点を含ん にのべたように、わが国でも若干のすぐれた調査研究があるし、 でいると思われるので内容を簡単に紹介する次第であるが、さき 問題提起の動機はともかく、著者が本書で分析を試みた諸問題

一、最近の調査としては、例えば東大新聞研究所編「都市勤労 市民層の政治意識とコミュ ニケーション行動」東大新聞研紀

> て、著者は同一の事象を互に相距った時期について対照させるた 査の多くが、現在の時点を中心として構成されている の に 対 し

前世期の Counting House(帳場)時代の事務労働者の実態

口、social mobility の研究としては、D. V Glass ed. Social mobility in Britain, 1954; Geoffrey Thomas, Labour 労働問題八号)。 要七、その要約、髙橋徹「ホワイトカラーの政治意識」(月刊 れば「新中間層」に該当すると思われる。 用している日本社会学会調査委員会の階級的地位の分類によ 本書でいう「黒服労働者」は、 右調査で採

ham, Trades Union, 1958. p.238. 参照 な 論

三、例えばイギリス組合運動についてシニカ ル mobility in Gt. Britain 1954~49. など

研究で意図した最も特異な点というべきであろう。今日の実態調 しかし同じ事務労働者といっても、その業態やこれをめぐる環境 占められているという点はどこの国にも共通した事実であろう。 ある。ホワイト・カラーやサラリーマンの大部分が事務労働者で 五一年の一○%に上昇したという点から見て首肯しうるところで 加し、その全労働力に占める比率は一八五一年の一%から、一九 める。とれは事務労働者がイギリスで過去百年間に十倍以上に増 おいて階級意識の問題を究明しようという方法論とそ、著者が本 にもかゝわらず残されている事務労働の本質的性格との相関点に は長い間に大きな変化を遂けている。この歴史的な変化と、それ 著者は blackcoated worker の典型を事務員(clerk)に求 である。

労働者の「誤りなき階級意識」ということが考えられているから

筆者によれば、「黒服労働者」の階級意識は労働階級に対する

結論は恐らく何人にも異存あるまい。 結論は恐らく何人にも異存あるまい。

――ということを問題にしているのであって、その前提には肉体合、「誤れる階級意識」――もしこの非難が当っているとすればと非難するにはあたらないであろう。何となれば、筆者はとうによって規定されるというマルクス流のオーソドックスな考え方によって規定されるというマルクス流のオーソドックスな考え方によって規定されるというマルクス流のオーソドックスな考え方によって規定されるというマルクス流のオーソドックスな考え方によって規定されるというマルクス流のオーソドックスな考え方によって規定されるというマルクス流のオーソドックスな考え方によって規定されるというマルクス流のオーソドックスな考え方によって、その前題には肉体との表面にあるとオリーをとり上によって、その前題には肉体

り具体的に問題を展開すれば次のようである。差異がないにもかゝわらずそうだというところに問題がある。よ服労働者」の今日の経済的地位が、実質的には労働階級のそれと帰属意識と疎外意識の複雑な交錯から成る。そしてそれは、「黒

その行動はいつも期待外れである。かれらは「紳士気取」と「自たちと統一した行動をとることを期待している。にもかゝわらず、たちと統一した行動をとることを期待している。にもかゝわらず、リアートであり、自己の労働力を資本家に販売する外に生計の資リアートであり、自己の労働力を資本家に販売する外に生計の資リアートであり、自己の労働力を資本家に販売する外に生計の資

己瞞著」に汚され、しょせんわれわれとは別世界の人間なのだ、

といった非難が肉体労働者の側からしばしばなされている。との

それを規定するファクターを発見するととであると。といし期待される階級意識から外れた「誤れる」意識をもっているとに向けられるものである。著者によれば、この非難は必ずしも不当ではないが、それが「所有と無所有」という余りにも広汎な観点からだけ階級地位を設定しているため、結局、その非難は必ずしる方をすることがあるという事実を実証するだけに終っている。方をすることがあるという事実を実証するだけに終っている。た方をすることがあるという事実を実証するだけに終っているとに向けられる階級意識から外れた「誤れる」意識をもっているとに向けられる階級意識から外れた「誤れる」意識をもっている。

market situation, work situation, および status situationの言語者が右の意味における主要なファクターとして挙げるものは

における差異を以下の点に求める。 にもとづくものとすれば、この差異の究明は階級意識の研究にと 混迷や自己瞞著にではなく、とのような situation の現実の差異 もつものではない。いま階級帰属意識の差異がイデオロギー上の 基本的には労働階級と同一の地位に立っている。しかしこのカテ 件についての個人としての交渉力の弱さ、失業の不安という点で 生計の資を労働力の販売に求める外ない無産階級であり、労働条 明した内容を少し見てみよう。 社会における地位ないし身分をいら(内容は分るがわれわれにと situation とは被用者の就労過程 (生産・管理・分配における) に 昇進・配置転換の機会など、いわば狭義の雇用条件を指し、work って出発点となる。著者はかくして、両階層の market situation ゴリーに入る者のすべてが必ずしも同一の market situation を っては聞き馴れない用語なので以下原語のまま用いる)。 おいてもつ人的関係をいゝ、status situation とは被用者の一般 つである。market situation とは被用者の所得、 第一 market situation の問題 とのようなファクターの設定の当否を問題にする前に著者の究 黒服労働者はなるほど、その 雇用安定度、

1905~6 年から 1955 年までの事務員の俸給と肉体労働者の所得比較表 (括孤内は 1905~6 年を基準とした増加率[%])

(1H hw/1 1/8 2000		- El 201 () - 3)		
職業	1905~6	1925	1935	1955
事務員 (男子 28才)	. €	£	£	£
銀行事務員	170	275	263	620
		(62°)	(53)	(265)
公務員事務職員	100	272	240	483
	•	(172)	(140)	(383)
地方自治体事務職員	90	200	200	475
(一般職)		(122)	(122)	(428)
鉄道事務員	80 .	180		450
*		(125)		(463)
肉体労働者	S	S	S	s
男子•少年	27.0	57.6	56.9	
		(114)	(111)	
男子(21才以上)	28.8			223
				(674)

平均労働時間(肉体労働者) 54.4

に小さくなっているが、多くの場合なお大きい。それは前世紀の上昇率の速さによって前世紀の「帳場時代」に比べれば遥かうこと。このシェーレは別表に示すように、肉体労働者の賃金

事務労働者の所得が、労働階級に比べて相対的に高いとい

45.9

ず、このような差異が今日なほ事務労働者に「上級の被用者」と が、今日の「事務所」時代には著しく縮少された。にもかゝわら

しての意識をもたせている点には変りがない。

もって優遇してきた。そこに特権的地位からくる特別の意識が タッフとしての忠勤を確保しておくために、人件費の極小部分 status に対する報酬とみなされ、雇主はかれらのオフィス・ス にしか当らないかれらの俸給を賃金算定の場合と違った原則を 化して、かれらの俸給がその労働力に対してというよりむしろ、 に事務労働者のもっていた稀少価値によって生じた格差が伝統

生ずるのもむしろ当然であろう。

る。それはかれらの意識形成にとって、第一の条件よりもっと 営者のもつ「所有」(ownership) に代る何ものかを与えてい 大きな影響をもつとさえ思われる。 ることである。労働階級が宿命的に負うているレーバー・マー ケットの喪失の危険が相対的に少いということは、かれらに経 事務労働者が一般に伝統的に高い job-security をもってい 事務労働者、とくに男子の場合は、経営者側のポストに昇

とれらの差異はかっての「帳場時代」には著しい特徴であった 休暇といった非金銭的なアドバンテージをもっている。 進する機会に恵まれていること、 いう特性にもとづく仕事の清潔さ、快適さ、テンポ、労働時間、 事務労働者は退職年金の恩恵にあづかるほか、頭脳労働と

> を形成する最も重要な社会関係(social relation)は生産・管理 第二 work situation の問題 近代産業社会において個人心理

絶される。機械生産の計算性(calculability)と規律性は生産の onality)を通じて経営および労働者の双方から physically に隔 で、その技術上および経済上の要請である非人間的合理性(rati-費者と社会的関係をもつ。ところで労働者は工場の組織機構の中 用者は好むと好まざるとにかゝわらず他の被用者、職制または消 ・分配の組織を通して発生する。分業の発展により、すべての被

す労働と技能の平準化を促進するから、一方で工場のメカニック じて工場外においても再生産される。との過程は当然のことなが 的に帰属化させる。つまり近代企業における技術の発展はますま ら、反面で労働者同志を physically に統合させ、かれらを社会 てこの関係は労働を商品として扱う labour market の作用を通 場における雰囲気を非人間的な対立(antagonism)に導く。そし

属意識の発展を阻止した。事務労働者の職場は小さな店に分散さ きることができるが、「黒服労働者」の場合はどうであろうか。 古い「帳場時代」の家父長的環境と労務管理とは、かれらの帰

その work situation は階級対立(峻別) と階級斗争感として割り それが団体行動の基礎となるのである。要するに労働者の場合、 によってのみ期待することができるという階級帰属意識を生み、 一の工場の労働者の労働条件の向上は他の工場の労働者との連帯

触が強い。そのうえ、さきにのべた maket situation としてかれ 等を併せ考えれば、かれらが肉体労働者に帰属意識をもたなかっ らの作業および報酬の基準に統一性がなく、個人的な昇進の機会 れ、多くの場合、工場労働者と隔絶し、かえって雇主と個人的接 たとしても不思議ではない。

近代的な「事務所時代」に入ると、ビューロークラティックな

管理方式がとり入れられ、職階秩序が確立 されて、 かれらの それは肉体労働者への帰属意識とならないで、逆に相互の距離感 位の特性から、なお管理者側への相対的近さを意識するかぎり、 ると同じような非人間的合理性と規格性が家父長的人間性にとっ mobility は上にも横にも閉ざされる。そうなると生産工場におけ 殊関係を払拭しきれない原因として著者は四つを挙げている。 ける合理化された管理機構が、なお古い「帳場時代」の個人的特 を髙め、 て替ることになる。しかしそうなっても、かれらがその労働と地 互に敵対する状態を作り出す。近代の「オフィス」にお

結論に達したのである。

要するに事務労働そのものの性格あるいは運営単位の規模から 闫事務労働者の場合、技能の平準化の基準が求めにくいこと、 地位別というように更に細分化されたこと、 「オフィス」の内部における労働の分化が部門別、 職階別、

その合理化の程度は工場労働の場合に比して相対的に低い

に比してなお小さいこと、

「黒服労働者」の管理の単位は生産工場の筋肉労働者の場合

益の共通性を意識するかどうかについての考え方如何にかゝって 労働者と基本的には同一の社会的地位にある今日でも異なるとい の基礎は労使間の利益が相反するかどうか、および被用者間の利 して狭義の無所有という階級的地位の自然的結果ではないという **ら帰結から、個人の自己疎外感が集合的連帯感に発展するのは決** いる。そこで著者は「黒服労働者」の work situation は、 わけである。かくして「黒服労働者」の status situation から、それは帰属感を促進するに大きな役割りをもたないという の構造

status(社会的地位) がどのように階級意識に結びつくかという 階級とは別の現象であるが、人の現実の生活においては、階級差 行動や地位に対する評価の区分を示すものであるからほんらい、 と身分差が深い連関をもっているという観点から、著者は social 問題を、

専問職の中流階級に高く与えられているという事実は著者の指摘プロ、ア゚ロッドペロッド 敬すべきもの」がその人の社会的地位を決定させている。このよ 事が清潔で非肉体労働だという事実が挙げられ、このような「専 報酬を支払われ重い責任を負わされているということの外に、仕 その仕事が高い教育程度を要求し、かつそれがそれに応じた高い をまつまでもなく明らかである。このような評価の基準としては、 済社会においては、身分差の基礎になる価値 づけ は企業 家 や 第三 status situation の問題 前述二つの条件以上に重要視する。 ところで、 近代経 status とは、ある人が他の人の

関係をもつのかゞとゝでの問題である。うな身分差の意識、つまり身分意識は一体、階級意識とどういう

弱める結果となっているといえる。者の身分上の対立感は根強く残って、全体としての階級連帯感を者の身分上の対立感は根強く残って、全体としての階級連帯感をがあっても、一方でこれに逆行する身分意識に帰属しようとする流れ労働者」にたとえ、労働階級の身分意識に帰属しようとする流れ

展を見たものである。ている。もちろんとれらの組合は何れも最近五○年間に急速に発ている。もちろんとれらの組合は何れも最近五○年間に急速に発五万に達し、四人の事務労働者中一人は組合員という割合になっとれば、一九五一年現在でその代表的五組合の組合員数は総計四とれば、一九五一年現在でその代表的五組合の組合員数は総計四

の利益と肉体労働者の利害とが基本的に同一であることを自覚しる。「黒服労働者」の場合もその例外ではない。かれらが、自ら利害関係に立つことを自覚するときにはじめて現われるものであ意識とはある被用者のグループが他のグループの被用者と共通の意識とはある被用者のグループが他のグループの被用者と共通のであるとは限らない。階級しも、それがそのまゝ階級意識の表現であるとは限らない。階級しかし、と著者はいう、組合の組織化あるいは団体行動は必ずしかし、と著者はいう、組合の組織化あるいは団体行動は必ず

たときはじめて階級意識の連帯があるのである。では、そのより

きがある。しかし階級意識全般の問題として見るときは、「黒服向し、他方は反対に下層つまり労働階級のそれへ帰属していく傾一般的には二つの方向をとって一方はなお、より上層の階級を志者」の身分意識も変化してきており、その変化も一様ではないが、むしろ両者は同質化の傾向にさえある。これにつれて「黒服労働むしろ両者は同質化の傾向にさえある。これにつれて「黒服労働

流階級と労働階級の階層差ということ自体が薄弱になっており、

では、10点につって、 引送りな方法でよる 本連帯を組織運動の中に発見する方法如何。

上で名称や目的をどう変えたか (例えば友 愛 組 合から労働組ような指標を設定して分析を進めている。 (4)ある組合が発展の途著者はこの点について、間接的な方法だと断わりながら、次の

合への転換)、回目的達成のためどういう手段をとっているか(例

で指導者または組合員の社会的政治的傾向、意識はどうか(例えるに出たかどうか(例えば一九二六年のセネスト当時の 行動)、 協党への加盟)、 はゼネストなど、階級的機危に際して同情的行動党への加盟)、 はゼネストなど、階級的機危に際して同情的行為に出たかどうか(例えば一九二六年のセネスト当時の 行動)、 は以上の場所の場所とばストに訴えるかどうか)、 四上部または横の組合組織との関えばストに訴えるかどうか)、 四上部または横の組合組織との関えばストに訴えるかどうか)、 四上部または横の組合組織との関えばストに訴えるかどうか)、 四上部または横の組合組織との関

ば議会主義を肯定するかどらか)

れ読者は正直のところ、著者の説明について行くだけで、その当れ読者は正直のところ、著者の説明について行くだけで、その当れいる。同じ事務労働者の組合といっても、各々発展の時期も速ている。同じ事務労働者の組合といっても、各々発展の時期も速たりと思えば、どうしてもこのような実証的な方法に頼らざるを得ないし、そういう方法をとらないで、単に外面的事象からアプリないし、そういう方法をとらないで、単に外面的事象からアプリないし、そういう方法をとらないで、単に外面的事象からアプリないし、そういう方法をとらないで、単に外面的事象から究明し代表組織をとり上げその性格を種々の角度および資料から究明し代表組織をとり上げその性格を種々の角度および資料から究明し代表組織をとり上げその性格を種々の角度および資料から究明し代表組織をとり上げその性格を種々の角度および資料を表している。

心を持ち、肉体労働者の優勢な組織への解消については余り乗気

る。その運動の目標、方向つまり基本的な性格は、労働階級のそ者の団結行動は労働組合の線で結成されているという こと で あともかく著者がこの実態の究明を経て達した結論は、事務労働れによい反省を与えてくれるというものである。 とのプロセスを省略してゼネラリゼーションを急ぎがちのわれわ否の判断はできない。しかし著者のこのようなやり方は、とかく

かれらが非肉体労働者の組合としての特殊の利益にかなり深い関かれらが非肉体労働者の組合としての特殊の利益にかなり深い関かれらが非肉体労働者の組合としての特殊の利益にかなり深い関連してこう断定する。もし「黒服労働者」との組合運動と肉体労働者のそれとの間に何らかの差異がありとするならば、それは労働者のそれとの間に何らかの差異がありとするならば、それは労働者のそれとの間に何らかの差異がありとするならば、それは労働者のそれとの間に何らかの差異がありとするならば、それは労働者のそれとの間に何らかの差異がありとするならば、それは労働者のそれとの間に何らかの差異がありとするならば、それは労働者のそれとの間に何らかの差異がありとするならば、それは労働者のそれとの間に何らかの差異がありとするならば、それは労働者のそれとの間に何らかの差異がありとするならば、それは労働者のそれとの間に何らかの差異がありとするならば、それはなく、work または market situation の差異によるものであると。ところで、著者はかれらの組合運動の性格の分析に当って、ると。ところで、著者はかれらの組合運動の性格の分析に当って、ると。ところで、著者はかれらの組合運動の性格の分析に当って、ると。ところで、著者はかれらの組合運動の性格の分析に当って、ると。ところで、著者はかれらの組合運動の性格の分析に当って、

結論である。

の現実の class situation に外ならないというのが著者の最終的

および work situation に規定されている。そしてそれがかれら ている。そしてこの背離は「黒服労働者」のもつ伝統的なmarket 帯を意識しながらも、最後の直接利益という点で後者から背離し の経済的地位の自覚の上に立ち、肉体労働者との巾広い利益の連 い。いずれにしても、「黒服労働者」の組合運動はかれらの今日 味深い。前者は「黒服労働者」中のアリストクラシー性を、後者は ブロレタリアート性を典型的に表現していることはいうまでもな 銀行事務員と鉄道従業事務員とを対照させているのはきわめて興 差異によって組合運動の性格に大きな距たりを生ずる例として、 との点で著者が、同じ「黒服の労働者」でも、その経済的地位の するかぎり、そとに同一利益の連帯がくづれる契機が存在する。 直接的な利益(労働条件や昇進、年金等)の点で特殊利益に拘泥 nefit)については、肉体労働者と深い共通性を意識しても、その 組合運動や社会、政治運動に対する理念(著者の ideological be るいは行動のし方(著者に従えば instrumental benefit)または 服労働者」の組合運動の性格が、組合運動の一般的目標、機構あ 利益に解消されるかどうかということであろう。とすれば、 とすれば、その成否の鍵は何といっても特殊利益が一般(階級) ある組合と同一の利害関係に立つという自覚が階級意識の前提だ でないという事実を決して見落さない。もし、著者がいうように、

運動の左東の線からのかられに対する批判は現在も痛烈であるために、とくに大戦中間期に作られたものだという。組合としている「黒服労働者」のあわれむべき自己瞞着を強調すとしている「黒服労働者の生活水準にあやかることに吸々トという言葉は肉体労働者の生活水準にあやかることに吸々トという言葉は肉体労働者の生活水準にあやかることに吸々している「黒服労働者のかれらに対する不信の念えなかったし、それが肉体労働者のかれらに対する不信の念えなかったし、それが肉体労働者のかれらに対する不信の念の者」の組合運動へのリアクションはお世辞にも対する批判は現在も痛烈である。
 職者は一八七一年労働組合法(イギリスではじめて団結権、著者は一八七一年労働組合法(イギリスではじめて団結権、著者は一八七一年労働組合法(イギリスではじめて団結権、

註

二、両者の賃金・所得の差異をより詳細に研究するには、A.L. Bowley, Wages and Incomes in the U.K. since 1860; K. G.J.C. Knowles and D.J. Robertson, Differences between the Wages of Skilled and Unskilled Workers, 1880~1950 (Bulletin of the Oxford Institute of Statistics 1951) を参照。

1954 はその歴史的過程を研究した好著。 三、E. Hobsbawm, Labour Aristocraey in 19th Century,

四、近代企業のもつ bureaucracy については A. W. Gouldner, Patterns of Industrial Bureaucracy 参照。 The patterns of Industrial Bureaucracy 参照。 Eatherns of Industrial Bureaucracy Williams of Industria

結論という言葉に多くの限定を与えながら――次のように結ぶ。三 以上に述べたような問題設定と分析とを通じて、著者は――(N・L・G・O・A)」の五組合である。

れば、かれらの階級意識は正にその経済的地位を如実に反映して、皆級という言葉のをありているかという意味で本調査からならば、「黒服労働者」は無産階級という階級的地位にもかょわらならば、「黒服労働者」は無産階級という階級的地位にもかょわらならば、「黒服労働者」は無産階級という階級的地位にもかょわらならば、「黒服労働者」は無産階級という階級的地位にもかょわらならば、「黒服労働者」は無産階級という階級的地位にもかょわらならば、「黒服労働者」は無産階級という階級的地位にもかょわらならば、「黒服労働者」は無産階級という階級的地位にもからでするだけのことで、かれらの階級意識がいかに誤っているかという階級意識そのものよ説明にはなり条件のみによって区分するとは、「黒れる階級意識」をもっていることは明らかでするだけのことで、かれらの階級意識がいかに誤っているかという言葉に多くの限定を与えながら――次のように結ぶという言葉に多くの限定を与えながら――次のように結ぶという言葉に多くの限定を与えながら――次のように結ぶという言葉に多くの限定を与えながら

めて紹介した。わが国における問題とも関連させて以下に少し卑四 以上本書において著者が云おうとしているところをとりまと事象の説明に役立つかぎりにおいて正当化されるのである、と。事実を理解するための便宜であり、階級の定義は、特定の具体的否定するものではない。階級という概念は、それによって社会的各定するものではない。階級という概念は、それによって社会的各定するとが実証された。もっとも階級をこのように定義づけるこいることが実証された。もっとも階級をこのように定義づけるこ

の今日的課題につながる社会科学上の問題である。る一社会事象の心理学的研究にとどまるものではなく、労働運動中で刻々に変動する階級意識をとり上げているという点で、単なの提起した問題は歴史的な過程を経て現代の資本主義経済社会のの提起した問題は歴史的な過程を経て現代の資本主義経済社会のの提起した問題は歴史的な過程を経て現代の資本主義経済社会のイギリスにおいて最近このような問題が提起された背景につい

見をのべることにする。

だからといって著者流に階級を全く抽象的なターミノロージーのたからといって著者流に階級を全く抽象的な多の手段と考えないで、特定事象を説明するための手段と考える。た概念と考えないで、特定事象を説明するための手段と考える。たて置づけが行われているとはいえないし、社会構造論上の明確なしかに、「階級」という概念をそれ自体内容をもつ目的的ある。著者は、「階級」という概念をそれ自体内容をもつ目的的ある。著者は、「階級」という概念をそれ自体内容をもつ目的的ある。著者は、「階級」という概念をそく抽象的なターミノロージーのの上下または区分の基準も緩床かつ相対的なターミノロージーのというにより、

いう問題も大した意味がなくなるであろう。 によって出来上った社会事象がその後の商品生産社会のメカニズムによって出来上った社会事象がその後の商品生産社会のメカニズムよって出来上った社会事象がその後の商品生産社会のメカニズムよって出来上った社会事象がその後の商品生産社会のメカニズムよって出来上った社会事象がその後の商品生産社会のメカニズムはがないことになろう。かくては著者の situation や status と味がないことになろう。かくては著者の situation や status という問題をしてしまうことは問題であろう。

れが一応肯定すれば、著者が「階級意識」を規定するファクター階級意識」とは同じことを意味しないという著者の主張をわれわについては著者も否定するものではないし、また「階級」と「階については著者も否定するものではないし、また「階級」と「階にのいては著者を一個である。

し方に問題はあっても決して一概に否定することは で き ない。 market, work および status situation という図式はどういう社会構成 論 上 の セオリーを前提にしているのか審らかにしえないが、始めの二つはいわゆる広義の経済的条件に当り狭義の労働条件と経営内の広義の雇用条件を意味すると考えてもよ い で あ ろ ら。 status という概念は stratification theory 上しばしば使用される用語で社会意識といわれるものよ一つといえるであろう。

にのアプローチから著者の得た結論は、そもそも「黒服労働者」とのアプローチから著者の得た結論は、そもそも「黒服労働者」とのではない。

「しいがある。即ち「黒服労働者」の組合運動の性格は、今日では、もはや社会的地位や身分について肉体労働者との消滅や清算えの一方的方向にあるのではなく、経済的条件の差異が特権的た社会意識の強化に逆作用しているという事実である。しかしとの点では例外がある。即ち「黒服労働者」の組合運動の性格は、今日では、もはや社会的地位や身分について肉体労働者との間に何らの意識の差異もないということである(もっともそこでも経済的特額が変いわけではない。組合運動という集団的行為も個々のメン題がないわけではない。組合運動という集団的行為も個々のメン題がないわけではない。組合運動という集団的行為も個々のメンを記述がある。個々の組合員が肉体労働者の意識とのではない。組合運動という集団的行為も個々のメントーの意思の集積である。個々の組合員が肉体労働者の意識とのではない。ということである。しかしそこにも問題がないわけではない。組合運動という集団的行為も個々のメントーの意思の集積である。個々の組合員が肉体労働者の意識とのアプローチから著者の得た結論は、そもそも「黒服労働者」とのアプローチから著者の得た結論は、そもそも「黒服労働者」というには、またいる。

化してこないという二つの事象の相関々係は一体どうなるのであ 間にかなり大きな距たりをもちながら、組合運動にはそれが顕在 ろうか。この点の究明は本書に欠けているが、「官公労働者」と いう「黒服労働者」の大群を労働戦線の大きな柱としている日本

の実情を考える時、是非とも知りたいところである。 のマス・メディアの作用を通じて促進されていることは否定し得ます。 階級自身についてもある程度認められるところであり、また今日 する「無関心」層を形成しつゝあるといわれる。とのことは労働 も積極的にもつことなく、むしろ労働運動や政治運動その他に対 よれば、中間層に属する者が、以上のどちらの方向えの帰属意識 ど)と対照させている。しかし、アメリカなどの社会学の通説に ち、労働階級えの帰属意識の強い階層(たとえば鉄道従業事務員な 通して形成されるのであるから、とくに「黒服労働者」の場合、 ないが、経営内における意識は、いかに商品社会だとはいえ、直 ない事実である。著者はこのような角度から問題をとり上げてい 重要なファクターと考えるべきであろら。 ちに社会意識につながるものではなく、生活の場における思考を 一般により上級の被用者として、むしろ経営側えの帰属意識をも 次に著者はこの三つのファクターを通じて、「黒服労働者」が

な実態の究明を通じて下した結論を日本の場合について考察する イギリスの実情を知ることのできたわれわれは、著者がその周密

さて、本書を通じて、いろいろ問題点はありながら、ある程度

余裕をもちたいと思う。

肉体労働者でかなり差異があることはわが国でも一般的には変り 拡大を利用して組合勢力の分裂を図ろうとする意欲がかなり強い ると思われるが、わが国の経営者の場合には逆にこのシェーレの の意識の中で徹底するほどに、両者の所得のシェーレは小さくな 違うものがある。所得についてみれば、労働力の商品化が経営者 がない。しかしその具体的な現われ方はイギリスの場合とかなり 企業別に組合が結成されていることも大きな関係がある。経営内 く、かつ経営者の解雇権が実質的に制限されていることによる。 よい。それは両階層を通じてわが国では「企業一家」の考えが強 合、ホワイト・カラーと肉体労働者でほとんど差異がないとみて うこともありうる。これに反して job-security の差はわが組の場 ことに注目しなければならない。従って今後シェーレの拡大とい 除けば、ホワイト・カラーが肉体労働者に比してとくにアドバン 国でも同じであろう。頭脳労働からくる仕事の清潔さという点を 地位をもっている点はわが国特有の現象というべきであろう(例 いえない。(むしろ逆の場合もある)たゞし官公労働者が特権的 テージに恵まれているということはわが国ではそう例が多いとは の昇進の機会がホワイト・カラーの場合圧倒的に多いことはわが のうちもっとも重要なことは、完全雇用も最低賃金の保障もまた えば恩給という問題を考えよ)。わが国におけるmarket situation 第一に著者のいわゆる maket situation がホワイト・カラーと 労働者が同一の条件と環境で働らくという狭い連帯感は生ずる余

外に出来る可能性が薄く、 その結果、 労働市場における連 帯 感

-職能別組合――のできる余地がない。もちろん企業の内部で

体系的な社会保障制度も欠如しているという事実である。この点体系的な社会保障制度も欠如しているという事実である。このことはイギリスでは想像をびしく現われるのが実情である。とれて、まれているという事実である。この点で大きな差異が生ずるのは大企業の労働者と中小企業労働者の間である。そこで階級意識の差異はホワイト・カラーと肉体が働者と中小企業労働者という事実である。この点体系的な社会保障制度も欠如しているという事実である。この点体系的な社会保障制度も欠如しているという事実である。この点体系的な社会保障制度も欠如しているという事実である。この点体系のなどに対象である。

がって、技能や技術を中心にした labour market が広く企業がって、技能や技術を中心にした labour market が広く企業がって、技能や対象を表現した。

かに低いと思われる。

ラミッド型の階層秩序の末端にいたるまで特権的文配者意識に馴の結果としてかれらがその経済的地位の低さにもかゝわらず、ピを励起源はいうまでもなく官僚国家の「天皇の官吏」であり、そその起源はいうまでもなく官僚国家の「天皇の官吏」であり、それはホワイト・カラーの中でさて最後に、わが国のホワイト・カラーの意識の宪明についてさて最後に、わが国のホワイト・カラーの意識の究明について

が日本の官公労組合の中に見出せるということは注目すべき現象で個人にだけ知覚しえた階級意識の偏差が、やゝ違った形であるてきた。ロックウッドがイギリスの組合運動の中に見出しえないの積極的な努力にもかゝわらず、この風潮をかなり根強く残したらされてきたことは周知のところである。戦後の官僚機構民主化らされてきたことは周知のところである。戦後の官僚機構民主化

えたその功積はまことに大きいといわねばならない。 れたその功積はまことに大きいといわねばならない。 斧えつを加書はイギリスの社会体制という背景なしには考えられない多くのる。調査の前に「戦術」があってはならない。そういう意味で本ある調査の前に「戦術」があってはならない。そういう意味で本ある調査の前に「戦術」があってはならない。そういう意味で本が本書で究明したようなファクターの分析が是非とも必要であり、階級意識の分析にはロックウッドをのよりでは、まづ「階級意識」しかし正当か否かということを判別するには、まづ「階級意識」

正一、日高六郎「階級」(社会学辞典・有斐閣)の項参照。 エawney, Equality, 1952, pp. 50~1 参照。 Tawney, Equality, 1952, pp. 50~1 参照。 化の趨勢にもかかわらず、資本制生産の発展に伴って無産階化の趨勢にもかかわらず、資本制生産の発展に伴って無産階化の趨勢にもかかわらず、資本制生産の発展に伴って無産階化の趨勢にもかかわらず、資本制生産の発展に伴って無産階との差をいう著者の見解は、わが国で一方でオートメ化していするという著者の見解は、わが国で一方でオートメ化しているとの差を考えるにつけ改めて考えればならない問題である。との差を考えるにつけ改めて考えればならない問題である。との差を考えるにつけ改めて考えればならない問題である。との差を考えるにつけ改めて考えればならない問題である。との差を考えるにつけ改めて考えればならない問題である。との方を考えるにつけ改めて考えればならない問題である。との差を考えるにつけ改めて考えればならない問題である。

九、大河内一男編「戦後日本の労働組合」第三章参照。

、イギリス労働組合における「無関心」の問題をとり扱った

工、イギリス労働組合における「無関心」の問題をとり扱った

「して結論はイギリスで大きなセンセーションを起した。
下して結論はイギリスで大きなセンセーションを起した。
下して結論はイギリスで大きなセンセーションを起した。
下して結論はイギリスで大きなセンセーションを起した。
下して結論はイギリスで大きなセンセーションを起した。
「して結論はイギリスで大きなとンをしまった。」

「人、争議調査会編「中小企業の労働組合」第三章参照。

九、大河内一男編「戦後日本の労働組合」第三章参照。

九、大河内一男編「戦後日本の労働組合」第三章参照。

?にぜい弱だというところにあることを忘れてはならない。 - 跳十二

十二、イギリスの場合、 要がある。一般に意識の行動の潜在化という現象(調査にも 治行動としてなかなか表現されないという事実は注目する必 カラー層の政治意職がかなり高いにもかかわらず、それが れているところは意外に多 われてこない) たところもある。 を廃止したところでも、 わが国の企業で今日 前掲新聞研の調査に明らかにされているように はホワイトカラーの特徴の一つではあるま なお職 経営側の反攻の過程で再び復活さい。のみならず戦後、一度この区 員 エ 員の差別 が厳格につけ 챠 ヮ ィ 政

ず「黒服労働者」が御用組合やスト破りあるいはファシスト・1、イギリスの場合、肉体労働者側からの批判にもかかわら・1、イギリスの場合、肉体労働者側からの批判にもかかわら

をもっと究明すべき必要を感じさせる。

割を果している事実こそは、かれらの意職と関連してその実けによって第二組合結成の中心となり結果的にスト破りの役日本のホワイト・カラー労働者がしばしば使用者側の働きか ある。ファシズムの片棒かつぎとまではいかなくても、 たという事実は、 制えの防波堤にならないばかりでなく、 ギー的混迷に陥った日本のインテリ層が戦前反ファシズム体 体制 かなる場合にもわれわれの念頭から離してならない問題で に支えられ は、 れてい その背景にある社会体制の問題と関連して るということに帰因している。 に足を踏み外さないだけの強固な社会 逆にそれに一役買っ イデオロ という 今日、